The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	人間科学による一つの狂詩曲 : 人間科学研究科による利他コンポジウムの報告
Author(s)	岡部, 美香; 千葉, 泉; 稲場, 圭信 他
Citation	未来共生学. 2017, 4, p. 357-385
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/60709
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

人間科学による一つの狂詩曲
人間科学研究科による利他コンポジウムの報告

岡部美香
大阪大学大学院人間科学研究科准教授

千葉 泉
大阪大学大学院人間科学研究科教授

稲場圭信
大阪大学大学院人間科学研究科教授

コメント

中道正之 大阪大学大学院人間科学研究科教授
栗本英世 大阪大学大学院人間科学研究科教授
中山康雄 大阪大学大学院人間科学研究科教授
山田一憲 大阪大学大学院人間科学研究科講師
上林 梓 大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程
新谷真美子 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

要旨

本稿は、2015 年度に開催された、大阪大学大学院・人間科学研究科所属の研究者による研究成果公開の一つの試み「利他コンポジウム」に関する報告である。大学等の公的な研究機関がその研究成果を世に問う試みとして、これまでは、公開講座・セミナー・シンポジウムという、一方向的かつ啓蒙的な形態が多く採用されてきた。これに対し、近年、サイエンス・カフェや哲学カフェ等、比較的小規模な対話形式の試みが盛んになりつつある。音楽コンサートとシンポジウムを組み合わせたコンポジウムも、後者の試みに属する。本稿では、2016 年 1 月 14 日と同 2 月 11 日に開催されたコンポジウム「想いをはせる」を主題として、この新たな研究成果公開の試みが有する社会的、人間形成的意味を考察する。同時に、報告の形式においても新たな挑戦を試みつつ、多様な学問分科間の共同研究とその成果公開におけるこれからの一つのあり様を提示してみたい。

目次

1. はじめに
2. 利他コンポジウムの始まり
2.1 「利他コンポジウム」の沿革
2.2 「利他コンポジウム」とは
2.3 「利他コンポジウム」の実施
2.4 社会的意義
3. 利他コンポジウム「想いをはせる」
3.1 「想いをはせる」ができるまで
3.2 歌が伝える来世からのメッセージ
4. コンポジウム参加者の声
4.1 「協働と言わない協働」を体験して感じたこと
4.2 作品「想いをはせる」
4.3 共約不可能な私
4.4 コンポジウムが生み出す体験の場
4.5 音楽を愛するということ
4.6 利他コンポジウムの経験
5. おわりに
5.1 音楽がかきたてる創造的な対話
5.2 人間が生きる世界に根ざす

キーワード

コンポジウム
人間科学
利他（主義）
共約不可能な他者
コミュニケーション

1. はじめに（岡部美香・教育人間学）

人間科学研究科は、人間を研究対象とする学問の諸領域がそれぞれの専門性を高めるにつれて蛸壺化するという閉塞状況を打開するべく、各領域の専門性を最大限に活かしつつ、また、相互に領域の境界を越えて協働しつつ、生きて活動する人間と加速度的に拡張・展開する人間社会のありようをトータルに考究することをめざしている。それゆえ、所属する研究者間の学際的な共同研究は、従来から活発に行われてきた。その際に、しばしば課題として指摘されてきたことの一つが、研究成果の一般公開のあり方である。

大学等の公的な研究機関がその研究成果を世に問う試みとして、これまでは、公開講座・セミナー・シンポジウムという形態が多く採用されてきた。これらの試みは、概して、専門領域の学問研究に精通した研究者が一般の人々に研究成果をわかりやすく伝える、という一方向的かつ啓蒙的なものであった。これに対し、近年、サイエンス・カフェや哲学カフェ等、比較的小規模な対話形式の試みが盛んになりつつある。

後者の試みにおいて重要なのは、学界と日常の生活世界との対話である。周知のように、近代以降、人間と人間社会のありようは学問研究（特に、自然科学研究）の成果によって劇的に変化した。今日、私たちは、生まれてから死ぬまで、衣食住はもとよりただ息をするだけでも（例えば、空気清浄機）、学問研究の成果の恩恵に与っている。だが一方で、その学問研究のために、私たちの生活はもちろん生命そのものまでもが深刻な脅威に曝されている。大気や水質の汚染、砂漠化、温暖化等のいわゆる環境問題、天然資源の乱開発とこの問題を解消するはずだった原子力発電……。予断を許さない問題は挙げればきりがない。学問研究が日進月歩の勢いで産み出す技術の許すままに開発を進めていくならば、ともすれば、人間にとって最も便利な社会が人間にとって最も生きにくい社会にもなりかねない。このような事態に歯止めをかけるためには、研究者は、一般の人々に専門知識を一方的に提供するだけではなく、一般の人々から日々を生きるための常識と智恵を学び、自らの研究成果を日常の生活世界でこそ意味のあるものとして位置づけなければならない。近代科学の黎明期に、I・カントがいみじくも自戒を込めて警告したように、キュクロープス（単眼の巨人）たる研究者は、学問研究に精通したその眼を、日常生活を営む市民の叡智の眼と重ね合わせ、双眸で世界を観ることによって初めて「独断のまどろみ」から目覚めることができるのである（カント 1973: 204; 2013: 119-120）。

本稿で報告する「利他コンポジウム」の目的は、まさに、いま述べたような学界と日常の生活世界との対話にある。コンポジウムとは、コンサートとシンポジウムとを組み合わせた造語であり、第2節で稲場が述べるように、学界と日常の生活世界、あるいは専門諸領域を相互に隔てている境界を越えて、人と人とが繋がり、学び合い、共に生きることをめざす研究成果公開の新たな試みである。以下では、この試みの概要とその社会的・人間形成的意味について、千葉と岡部が実施したコンポジウム「想いをはせる」を基軸として報告する。

その際、報告の様式についても、私たちは新たな挑戦を試みた。さまざまな境界を越えた学際的な共同研究や成果公開といえば、確かに、これまでにはない学識や学術体験の誕生・生成を期待させるが、実際のところ、難しい課題も多い。互いの方法論の違いに戸惑うのは当たり前としても、基本概念一つを定義して共有するのもままならないことがある（鈴木 2013）。そこで、本稿では、共有できない、共有するものがないという共約不可能性自体を共有する学際的共同体の編成を試みた。換言するなら、一つの目的（学界と日常の生活世界との対話）を共有しつつも、それぞれの思考の方法論や観点、使用する概念、文体等は敢えて統一・共有せず、とはいえ対話的・応答的となるように協働で報告することにした。この報告の様式を、本稿では、異なる曲調をメドレーのように繋げたり、異なる楽器群が同じ主題をそれぞれの特徴を活かして次々に演奏したりする等、自由な形式で民族的あるいは叙事詩的な内容を表現する楽曲の様式に擬え、狂詩曲と呼ぶ。

以下では、まず、稲場がコンポジウムの基本方針を提示し（第2節）、これに対して千葉と岡部が応え、その基本方針をコンポジウム・プログラム「想いをはせる」の実践を通して現実化した経緯を辿り（第3節）、さらに、千葉と岡部のこの実践に対して、幾人かの研究者と大学院生が応えてコメントし（第4節）、最後に、彼（女）らのコメントに対して千葉と岡部が応える形で自分たちの実践を省察する（第5節）。この報告を通して、共同研究とその成果公開におけるこれからの学際性（学問分科間の共生）の一つのありようを提示してみたい。

2. 利他コンポジウムの始まり（稲場圭信・共生社会論）

2.1「利他コンポジウム」の沿革

2014年度、人間科学研究科の競争的研究費であるヒューマン・サイエンス・プロジェクト「利他主義の人間科学の創生に向けて」において、利他行動とは何か、何のために利他行動を求めるのか、望ましい利他行動とは何かといった問いに筆者らは応答した。利他行動の状況を俯瞰的・体系的に討究し、利他行動の諸要因や布置連関を記述・説明した上で、利他行動にまつわる諸問題の解決へと誘う具体的な手法・技法を検討した。その成果は『未来共生学』第2号[1]にまとめた。

2015年度は、「利他コンポジウム」という新たな仕組みを構築し、「利他主義」という価値観を含みこんだテーマの社会へのアウトリーチ、社会的実験研究を行うことにした。

2.2「利他コンポジウム」とは

讃美歌アメージング・グレースの大合唱を紹介した記事が2016年元旦に掲載された（「オバマが歌った、ゆるす心」朝日新聞、2016年1月1日付）。アメージング・グレースは、黒人奴隷貿易に関わった英国人ジョン・ニュートンが奴隷貿易の船を降り、牧師となった数年後に作詞したものだ。罪の贖い、赦し、神の恵みへの感謝が歌われている。かつて奴隷取引で栄えた港町、サウスカロライナ州チャールストンで、2015年6月、白人至上主義の男に牧師ら黒人9人が射殺された。その追悼式で、スピーチをしていたオバマ大統領がこの有名な賛美歌アメージング・グレースを突然歌い始め、たちまち大勢の参列者による総立ちの大合唱となった。同紙面でピーター・バラカンは、「歌には、何よりも人をまとめる力がある。歌詞だけではなく、メロディも、そして歌うという行為自体がエモーショナルなものだ。ベトナム反戦運動、南アフリカの反アパルトヘイト運動でも、歌の貢献は大きかった」と述べている。

歌は人をつなぐ。では、議論はどうか。議論は時には人を分断させることもある。ならば、歌と議論の場を融合させてはどうか。それが、コンサートとシンポジウムを合体させた「コンポジウム」である。2010年頃に、東京大学の安冨歩が、大阪大学の深尾葉子や本論の執筆者の一人である千葉らとともにはじめた。

東日本大震災後、宮城県出身の両親を持つ千葉は、みずから創作した震災復興支援ソング「それでも桜は咲く」を歌ってきた。

それでも桜は咲く　大地に根をおろして　きびしい冬の日々にも 新たな芽育みながら
それでも桜は咲く　寒さにじっと耐えて　春の訪れ告げる　そのいのち続くかぎり

千葉は、中南米の多様な民衆文化の形成過程を考察する際に、民族音楽を水先案内人にするという独創的な研究実践をしている。軍事政権下に耐えしのいだ民衆の営みも歌とともにあった。

このコンポジウムに、利他主義というテーマ設定を入れて2015年に実施したのが「利他コンポジウム」である。

2.3「利他コンポジウム」の実施

「利他コンポジウム」の実施にあたり、以下の実行委員会を組織した。

委員長：中道正之
副委員長：志水宏吉
事務局長：稲場圭信
構成員：渥美公秀、岡部美香、千葉泉、中山康雄、山田一憲
人間科学研究科教員その他

第1回（2015年12月5日）　京都・京北町 KAYABUKI NOTE
音楽：千葉泉、きしもとタロー、熊

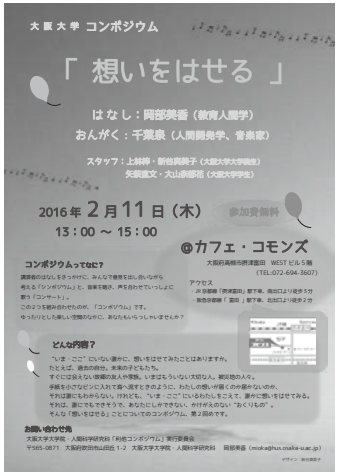

図1　利他コンポジウムのちらし

澤洋子
講演：稲場圭信「時代の変化に利他を考える」
第2回（2016年1月11日）　岩手・野田村 サテライト
音楽：千葉泉他
講演：渥美公秀「被災地のリレーとネパールの現状」
第3回（2016年1月14日）　大阪・高槻 カフェ・コモンズ
音楽：千葉泉他
講演：岡部美香「想いをはせる」
第4回（2016年2月11日）　大阪・高槻 カフェ・コモンズ
音楽：千葉泉他
講演：岡部美香「想いをはせる」
第5回（2016年2月11日）　大阪・高槻 カフェ・コモンズ
音楽：千葉泉他
講演：上林梓「想いをはせる」
第6回（2016年3月8日）　大阪大学人間科学研究科　インターナショナル・カフェ
音楽：千葉泉、きしもとタロー、熊澤洋子
講演：中山康雄「母子関係から見る人と人のつながり」
山田一憲「ニホンザルの協力行動」

2.4 社会的意義

利他コンポジウムでは、学術的議論を公共のアリーナに開き、音楽や芸術など五感に訴える身体的な技法も取り入れて市民と共に語る。はたして、利他コンポジウムは共生社会をつくる営みに貢献するであろうか。

第二次世界大戦後、ハーバード大学社会学部の創設者ソローキンは、「創造的利他主義研究センター」を立ち上げた。不確定性が高い社会において、人間の特性を探究する先駆的な研究であった。半世紀以上経った今、問答無用とばかりに、強い言説が社会を覆い尽くそうとしている。格差社会、無縁社会と言われる時代にあって、学際的な視点から、国際的かつ地域コミュニティレベル、幼児から中高年、サルまで射程にいれて包括的に利他主義にアプローチする「利他コンポジウム」は、研究成果を社会に還元するという点で社会貢献にもつながるのではないか。今後の社会的取り組みの一つの形を提示したと考えている。

3. 利他コンポジウム「想いをはせる」

3.1「想いをはせる」ができるまで（岡部美香）

2015年7月6日、ヒューマン・サイエンス・プロジェクトの会合の席で初めて、稲場から利他コンポジウムに関する基本方針が提示された。「学術的議論を公共のアリーナに開」くこと、「音楽や芸術など五感に訴える身体的な技法も取り入れて市民と共に語る」こと、これらを通して「共生社会をつくる営みに貢献する」ことをめざす――この課題に対して、岡部は、コンポジウムの主題と構成メンバーを具体的に次のように構想することで応えようと試みた。

3.1.1 主題

『未来共生学』第2号において、岡部は、相互性が根本的に成立しないような、共約不可能な他者に対する倫理的応答について考察する必要性を論じた（岡部2015）。いま・ここにいる人だけではなく、もう／いまは／まだ・ここにいない人に対して応答することは、歴史的な時間を生きる人間にとって不可避である。初めて会う人との関係に、どちらもが直接かかわってはいない戦争等の出来事が影を落とすこともある。あるいは、私たちが日ごろ何気なく捨てているごみや使っている電気が、思いもよらず遠くの人や決して会うことのない未来の人に影響を及ぼすことも想定され得る。共約不可能な他者は私たちの生のありようを限定するが、他方ではまた、その限界を超越する契機ともなる。岡部は、このような共約不可能な他者への応答について一般の人々とともに考えることを、コンポジウムの主題とすることにした。

その際、岡部には、この主題にぜひとも重ね合わせたい曲があった。「アンヘリートのお別れ」（チリ民謡）である。この曲のより詳細な解説は千葉が後述するが、この曲の主題は、亡くなった乳幼児が天国に召される前に両親に向けて「悲しまないで」と慈愛の言葉を贈る、というものである。実際には言葉も話せない、しかももうここに（生きては）いない乳幼児から、音楽家の声と演奏を

通して両親へと届けられる仮構のメッセージ。この曲が人々の間でずっと歌い継がれてきた意味を考えることが、共約不可能な他者への応答というコンポジウムそのものの主題にぴったり当てはまるように思えたのである。

しかも、岡部にとって重要なことは、この曲が長調を基本としていて明るく響く、という点であった。一日の労働が終わり、陽が沈もうとするころ、三々五々、友人・知人が集まり、宴が始まるかのような、そんな明るい曲調のなかにつねに密やかに、とはいえ確かに、ある翳りがたゆたっている。スペイン語の歌詞がまったくわからないとしても、楽器の音色と声の響きにすでに「アンヘリート」の存在が顕れている。しかも、千葉は実際の葬礼の場でこの曲を歌ったという稀有の経験を有する。その千葉の歌と演奏でこの曲を聴くという体験を媒介にするなら、共約不可能な他者との言語を超越した応答についても語り合うことができるのではないか。

千葉は、以上の案を快く受け入れてくれた。そして、岡部の提示した主題に真摯に向き合い、より深く理解しようとしてくれた。会合を重ね、メールを交わすなかで、漠然としていた提案が具体的なかたちを成していく過程は、ただテキスト上の理念でしかなかった自らの思考に息が吹き込まれ、現実の生活世界のなかで脈を打ち始めるかのような、誕生・生成の歓びを感じさせてくれるものであった。

3.1.2 構成メンバー

コンポジウムを実施するには、千葉と岡部以外に、複数名のスタッフが必要となる。受付、参加者の案内係、準備・運営のアシスタント、写真・ビデオ撮影（記録用）などの実務があるためである。大学が主催する企画では、通常、大学院生と学生がスタッフとして採用される。今回も複数名の大学院生と学生に協力してもらったのだが、敢えて彼（女）らには、構想・計画の段階から千葉と岡部の協議にも参加してもらい、コンポジウムの内容や方法について積極的に意見を出してもらった。というのも、特に大学院生には、将来的には、単なるスタッフではなく、自ら企画者となってコンポジウムを主体的かつ自律的に運営してもらいたいと考えたからである。実際に、スタッフの大学院生2名のうち、一人（上林梓）は、利他コンポジウムを自ら中心となって企画・実施し（2016年2月11日開催の第5回）、もう一人（新谷真美子）も、関西地区で開催される利他コンポジウムにおいてほぼ毎回、準備・運営のリーダーを務めるようになっている。

千葉と岡部、そして大学院生・学生スタッフ5名は、2015年7月から随時、会合を重ね、8月に会場の下見をし、10月には実施内容を決定し、11月、12月とリハーサルを重ねつつ広報を行い、2016年1月14日（18:30 ～ 20:30）と2月11日（13:00 ～ 15:00）の本番を迎えた。

3.1.3 実施内容

千葉と岡部による利他コンポジウム「想いをはせる」の実施内容は次の通りである。

導入　ゲームで参加者どうしの親交を図る。

- 言葉と声を使わずに、参加者全員でバースデーリングを作る。
- 互いの名前を呼び合いながら、ボール投げをする。
- くじをひいて、共に語り合うグループを作る。

展開　いま・ここにいない人に「想いをはせる」。

- 何の情報も提供せず「アンヘリートのお別れ」をただ聴いてもらう。
- 次に、2つの課題を念頭に置きつつ、もう一度「アンヘリートのお別れ」を聴いてもらう。課題は、どこの国（地方）の歌だと思うか、誰から誰へのメッセージソングだと思うか、である。
- 歌・演奏後、グループで話し合い、出た意見を全員で共有する。
- 千葉が「アンヘリートのお別れ」の歌詞と背景について解説する。

（休憩）

- 岡部が、いま・ここにいない人に想いをはせる、いま・ここにいない人に応答するという文化が、日本にもかつてあったことを説明する。続いて、同じ目的の下で現在、開発中の科学技術・デジタルクローンについて紹介する。その後、グループで、前者と後者を比較しつつ、生と死を巡る人間どうしのコミュニケーションについて考えを述べ、全体で共有する。

写真1　1月14日のコンポジウムの様子

写真2　2月11日のコンポジウムの様子

終末　合唱と合奏を通して共に生きることを体験してもらう。

・もう一度、参加者に別の歌を聴いてもらい、どこの国（地方）の歌か、誰から誰へのメッセージソングか、について想いをはせてもらう。

・最後に、その歌を全員で合唱・合奏して、終了する。

3.2 歌が伝える来世からのメッセージ（千葉泉・共生社会論）

岡部の提案を受け、千葉は、南米チリで歌い継がれてきた「アンヘリートのお別れ」という幼児葬礼の歌の演奏と解説を担当することになった。それは二重の意味で、目の前にいない共約不可能な他者に「想いをはせる」という試みであった。

3.2.1 アンヘリートのお別れ

古くローマ帝国時代以降、地中海沿岸のカトリック系諸国では、幼くして亡くなった子どもの魂を聖なる存在とみなし、その昇天を祝う、という風習が存在してきた。南米チリの中央部でこの儀礼は「アンヘリート（小さな天使）の葬礼」とよばれ、「悲しみの昇華装置」として、今日でも重要な社会的役割を果たしている（千葉 2005）。

以下は、千葉が「歌い手」として参加する機会を得た儀礼に関する記述である。

> ある日の夕刻、家族や親族、隣人たちが参集した家の居間には、幼児の亡骸を収めた白い棺桶がテーブルの上に置かれている。これを囲むように座った歌い手たちは、ギターやギタロン（チリ独自の25弦ギター）の奏でる長調の響きに乗せて、天地創造やイエスの生誕など、聖書にちなんだ内容の十行詩を順に歌っていく。こうして、悲しみの中にも、厳かで敬意に満ちた雰囲気のもと一夜が過ぎる。
>
> やがてあたりが白み始める翌早朝、埋葬のため、棺を運び出す直前に歌われるのが「アンヘリートのお別れ」である。この歌の特徴は、名称が示すように、歌い手がアンヘリートになり代わり、「一人称」（わたし、ぼく）で別れを告げることにある。早過ぎる死は神さまの定めた運命であったこと、自分は喜びとともに旅立ち、天国で家族の幸せを神さまにお願いすること、悲しまないでほしいことなど、深い愛情と思いやりに満ちた言葉が参集者に向けて歌われていく。わが子の発する優しい言葉の数々に、それまで悲しみをこらえてきた母親は思わず号泣し、その場は耐え難いほどの苦悩に包まれる。
>
> ところが、この歌が歌われる数十分の間に、一種のカタルシス（浄化）が起こる。亡くなった幼児自身が、「悲しまないように」という気持ちを言語化して明確に伝える、という形式を取ることで、この本来悲痛な出来事を、積極的に受け容れるように、列席者を優しく、そして力強く誘うからである。この儀礼で千葉が経験したのは、まだ涙に濡れた目のまま、微笑みを湛えた家族の表情であった（千葉2016: 258-261）。

歌詞の大半は、伝統的な宗教観に基づいた内容だが、時に幼子の名前や病名、亡くなった病院の名称など、極限まで具体的な表現も即興的に盛り込まれる。こうして家族は、亡くなった子どもが直接語っているかのような感覚を強く覚えることで、理屈では理解しつつも実感できなかった「悲しむべからず」という伝統的観念を、感情レベルでも受け入れるきっかけを得、その結果、一種の安らぎ、あるいは救いを覚えるのである。

本来届くはずのない、亡くなった幼児の思いを伝えることで、家族の深い悲しみを昇華する契機を与える。それが「アンヘリートのお別れ」の歌である。

"DESPEDIMENTO DE ANGELITO"	**『アンヘリートのお別れの詩』**
[Chile, verso]	**（チリ、ベルソ）**
Letra: Jorge Céspedes	**（作詞：ホルヘ・セスペデス）**
< 1ra décima >	〈第１の十行詞〉
Ya me voy a despedir	もうお別れをしなくちゃね
de este mundo terrenal.	ぼくはこの現世の世界から
Me voy hasta el Eternal	永遠の国へと行くんだよ
por mis padres a insistir.	父さん母さんのために
Me tocó poco vivir.	短い命だったけど
La alegría fue mi anhelo.	喜び望んだこのぼくです
Hoy emprendo un largo vuelo.	長い旅路に今日出ます
Llegaré hasta el Infinito.	無限主のもとへ行くのです
Amigos, el angelito	皆さん、ぼくアンヘリートは
YA SE VA PARA LOS CIELOS.	**もう天界へと発つのです**
< 2a décima >	〈第２の十行詞〉
Madre, no llores por mí.	母さん、どうか泣かないで
No quiero irme en tristeza.	悲しんだままで行きたくないの
Porque es una nobleza	幸せに天に飛ぶことは
volar al cielo feliz.	尊いことであるのだから
Yo voy a rogar por ti.	あなたのために祈ります
Despídeme con besitos.	口づけで送り出してよね
Tu confianza necesito	どうか信じていて欲しいの
para rezar a mi modo.	ぼくなりにお祈りするために
Intercederá por todos	みんなのためになり代わる
ESTE QUERIDO ANGELITO.	**このいとおしいアンヘリート**
< 3ra décima >	〈第３の十行詞〉
Adiós, precioso bautizo.	さよなら、美しき洗礼よ
Adiós, corona de flores.	さよなら、花の冠よ
Olviden tantos dolores.	どうか悲しみは忘れてね
Esta suerte Dios la quiso.	神様望んだ運命だから
Éste será el nuevo aviso.	もう一度言っておきたいの
Que cantaré por los cielos.	ぼくは天で歌います
Tengan fe y mucho consuelo.	どうか信じて安らかに
Mi creencia va latente.	ぼくも信じているからね
Va el ángel humildemente	謙虚に旅立つ小さな天使
A ROGAR POR SUS ABUELOS.	**祖父母の幸せ祈るため**
< 4a décima >	〈第４の十行詞〉
Adiós, madrina y padrino.	さよなら、洗礼の母さん父さん
Adiós, primeros zapatos.	さよなら、始めて履いた靴さん
Me voy y vuelvo más rato	行ってしまうけどまた後で
a señalar el camino.	道を知らせに来るからね
Hoy cumpliré mi destino.	今日ぼくは運命を全うし
Yo seré el fiel angelito.	忠実なアンヘリートになるのです
Que tendré un lugar bonito	ホセファの谷の中にある
en el valle'e Josefá	素敵な場所に行くんだよ
Y cantando esperará	そして歌いながら待ってます
POR SUS PADRES Y HERMANITOS	**父さん母さん、兄弟のために**
< Despedida >	〈「別れ」の十行詞〉
Al fin me despediré,	とうとうお別れを言わなくちゃ
cogollo de manzanilla.	マンサニージャの芽よ
Escucho mil campanilla	もう歩み始めた道に響く
p'al camino que empecé.	千もの鐘の音が聞こえるよ
Muy feliz yo volaré	幸せ一杯に飛んで行くよ
para encontrar la gloria.	天使の栄誉に浴すため
Me los llevo en la memoria	みんなの事は心に刻んで

con alegría y cariño.	喜びと愛情とともに覚えているよ
Y en el cielo hoy un niño	そして天では今日一人の子供が
le contará a Dios tu historia.	神様にあなたのことを話すはず

3.2.2 歌を通じて未知の人々に想いをはせる

このコンポジウムでは、それ自体「想いをはせる」ことを真髄とする歌を用い、参加者たちにも「想いをはせる」という行為を体験してもらった。事前に一切説明を行わず、「誰かから誰かへのメッセージ」ということだけを説明した上で、この歌を原スペイン語で歌い、聞いてもらったのである。

それは、言語も風習も異なる、見知らぬ人々のある切実な想いに、歌声とギターの響きだけに意識を集中して接近するという、一見不可能に思える試みだった。

千葉は、歌い手として儀礼に参加した時の状況を思い出しながら、できる限り気持ちを込めて歌った。その後、参加者には、小グループに分かれ、感じたことを話し合ってもらった。ゲームで打ち解けていたこともあり、彼らの全員が積極的に発言していった。

結果は驚くものであった。スペイン語を、つまり歌詞の内容を解さない出席者たちが、極めて具体的、かつ実際のコンテクストに近接する回答を、次々に口にしていったからである。「丘の上から空に向けて歌っている」、「港から海に向けて、旅立つ人にお別れしている」、「親が子に愛情を伝えている」、「亡くなった人に語りかけている」…。同じテーマで2016年7月23日に実施したコンポジウムでは、ある中学生の男子が、「子どもが親に、心配しないでと言っている」と、この歌のコンテクストや意図をほぼ完璧に言い当てた。

この歌の旋律は、音楽的には長調で、一見陽気に聞こえるタイプのものである。単に「陽気な歌」と感じる人が多いのではないか、と予想していたが、結果は異なった。「誰かから誰かへのメッセージ」という、極めて抽象的なアイデアと気持ちを込めた歌声だけを手掛かりに、見知らぬ他者の想いに近づけることが示されたのである。

そして、歌に続いて岡部が提示した、伝統的な風習に関する複数の事例は、その場にいない、直接対話することがかなわない人々との交わりに関する知恵が、日本にもかつて広く存在したことを示唆するものであった。

4. コンポジウム参加者の声

では、以上に述べてきたように、稲場が基本方針を示し、千葉と岡部が具体的にプログラム化したコンポジウム「想いをはせる」は、参加者にとってはいかなる場だったのだろうか。

4.1「協働と言わない協働」を体験して感じたこと（中道正之・比較行動学）

千葉の歌を聞き始めたところから思いおこそう。聞いたのは7か月前であるが、20人ほどで満員になるやや細長の小さなスペースのどこに私が座り、どんな姿勢で耳を傾けていたのかを今も鮮明に覚えている。しかも、歌う千葉、20人ほどの他の人たちとともに聞く私自身を、別の私が部屋の上方からカメラで写したかのようなスチール写真が、私の頭の中にあらわれてくる。その写真を見ながら、振り返ってみよう。

霊長類研究者として、サイエンス・カフェなどの小規模な集りの中で、一般の人たちに、サルの話をすることを何度か経験している。しかし、床に敷かれたゴザや壁に打ち付けられた狭い板などに隣の人と体の一部を接しながら、話者としてではなく、聴衆のひとりとして聞くのは、全く初めての経験であった。部屋の中には、私と同じ立場の同僚の教員もいたが、私の周りには、歌を聴く前に、簡単なゲームの中で名前だけを覚えた人たちのみであった。このような状況が、新鮮で心地よい緊張と興奮をもたらし、鮮明な記憶として私の中に残っている理由の一つだと思う。でも、もう一つの別の理由もあると思う。

千葉の歌は私の心を動かしてはいるのだが、それをすべて言葉にできているわけではない。でも、初めて出会った人たちの言葉を聞きながら、あるいは、その言葉に助けられて、自分だけでは言葉にできなかった自分の思いを少しずつ頭の中で言葉に表していくことができた。参加者全員が共同作業で形あるものを作り上げているわけではない。歌を聞き終わった後からも、参加者それぞれの固有の歌のイメージを抱いているはずなのだが、参加者がお互いに話し合うなかで、それぞれが自らのイメージを固めていったのだと思う。参加者が気

のつかない間に、互いに助け合うという協働作業を行っていたと言ってよいのかもしれない。

千葉の歌の後で、岡部のメタ・メッセージについての語りがあった。言葉をもちいてメッセージを送るとき、同時に、語る人の表情や口調、周囲の状況などが補い合ってメッセージが伝わることがメタ・メッセージであるという話であったと思う。千葉の歌を聞き、初めての人たちとイメージを語り合った後であったからこそ、岡部の語りに一層の説得力を感じた。「見えないもの、聞こえないもの」からもメッセージを受け取ることができるのが人であるという岡部の言葉にも、しっかりとうなずくことができた。

今回のコンポジウムは、文化人類学者の千葉と教育哲学者の岡部という異分野の研究者が「想いをはせる」をテーマにした協働作業であった。しかも、二人の研究者が参加者に伝えるという一方向の流れだけではなく、同じ空間にいたすべての人たちからも様々なメッセージが発信されていたように思う。もちろん多くの人は聞き役であったが、話し言葉にしなくても、表情や、頭や手などのわずかな動きで、自分自身では気がつかない間にメッセージを発していたはずだ。聞き役の一人であった私もそのようにしていたと思う。二人の研究者がそのようなメタ・メッセージを感じながら歌や語りを進めていたことも事実だろう。

研究者間の実証的な議論が科学の前進のためには不可欠なことは当然である。他方、今回のようなコンポジウムは、異分野の研究者の相互理解の姿勢、さらには、一般の人々からも聞くという姿勢によって初めて成り立つ空間と時間であり、このような空間と時間も人間科学の前進には不可欠であると、強く感じた。そして、教員という研究者だけでなく、大学院生、あるいは学部生も、このような空間と時間を、研究者としても一般の人としても共有してほしいと強く思った。

4.2 作品「想いをはせる」(上林梓・教育人間学)

混ぜ合わされ、薄くのばされた絵の具が乾いて残るパレット。乾いてしまった絵の具は、かつて夢中になって絵を描いた確かな痕跡ではあるけれど、混ぜ合わせていたそのときとはどこか違って見える。「想いをはせる」という体験は、そのときに手にした絵の具を思うままに混ぜ合わせること。混ざり合う色は、そのときそのときで違う。そして、「想いをはせる」という体験はまた、今はもう乾いてしまった絵の具の痕跡から、混ぜ合わせていたそのときを想起すること。時間が経つと、また味わいも違う。

コンポジウム当日、私はスタッフとして参加していた。その気になれば、当日の参加者と一緒にその場にまざることもできたはずだ。でも、私はそうしなかった。実際のところ、スタッフである私は、歌詞の内容、ある意味ではなぞかけの“答え”を知っている存在でもある。そういう自分が加わると、参加者の「想いをはせる」という体験を邪魔してしまうのではないか。そう考えて、そのときの私は加わらないということを選んだ。私には、そう確信する理由があった。

コンポジウムの企画が立ち上がったとき、千葉、新谷、上林の三人で、ある実験を試みた。それは、スペイン語に馴染みのない新谷、上林の二人が、何の前情報もなく千葉の歌を聴くと何が起こるのだろうか、という問いから始まった。聴き手の私にとっては、好奇心がくすぐられるような、ちょっと面白そうな実験という感じであったが、歌い手の千葉は全く異なる心持ちのようだった。大学の講義で歌うときとは違って、自分の歌がどれだけのインパクトをもっているのか、音楽家としての力量を試されるような感じがして怖い、実験を始める前に千葉はそのようなことを語っていた。実験を開始して、緊張した面持ちの千葉が1曲目を歌い終えるや否や、新谷が「音がこちらまで響いてこない」と言いながら、椅子の場所や角度を変え始めた。うまく歌えなかったのか…、と千葉は表情を曇らせた。千葉の歌声はここへもとんでこない、私も確かにそう感じていた。それは、よく通る千葉の歌声が、私へと向かってくるように思った瞬間、ブーメランのごとく、ものすごい速さで千葉の方へと戻っていく、そんな感覚だった。そのことを伝えると、千葉が驚きの表情を浮かべた。千葉は、その歌を歌う度に、過去の自分と対面しているような気持ちになる、もしかすると聴き手に向けてではなく、自分に向けて歌っていたのかもしれない、と語った。私は、目の前に起こった不思議な出来事に没入していた。改めて言葉にしてしまうと、どこか信じがたいような出来事に聞こえなくもないが、これこそが、まぎれもなく、私自身の「想いをはせる」体験そのものであった。私は、コンポジウム「想いをはせる」の第0回目の参加者だった。

「想いをはせる」の本番当日、参加者一人ひとりの「想いをはせる」体験の傍で、私はただ佇みながら、それぞれのパレットの上で絵の具が混ぜ合わされていくのを見ていた。時々、千葉と新谷と一緒に、あのとき私が手にして混ぜ合わせた絵の具の痕跡を確かめながら。

4.3 共約不可能な私（山田一憲・比較行動学）

2016年2月11日のコンポジウムは、息子を連れて参加した。コンポジウムでは、参加者全員で合唱・合奏できるように、カスタネットやマラカスなどのさまざまな打楽器が準備されていた。彼は保育園でトライアングルの経験があったので、いろんな楽器を叩いて楽しんでいた。このコンポジウムで「アンヘリートのお別れ」を聴きながら、私が想いをはせたのは、この息子のことだった。

彼は生まれたときに病気をしている。当初は経過観察だった症状はどんどん悪化し、生後4ヵ月の間に、4度入院して、2度大きな手術を受けた。優秀な医師は、極めて詳細に、誠実に、病状を説明した。確率は低いが、という前置きがされていたが、今後の成長に伴ってあらたな病気が見いだされる可能性があることと、その病気の厳しい予後も示された。

その頃、私が考えていたことは二つあった。一つは、命に対する油断。私は野生霊長類の行動研究を専門としてきた。ニホンザルは春になると子ザルが生まれる。子ザルの魅力は、母ザルだけでなく、集団の他の個体や、サルを観察する人間の心を華やかにさせる。しかし一方で、子ザルは死ぬ。霊長類は、子どもの死亡率が極めて低い動物であるが、それでもやはり、毎年一定の割合で赤ん坊が死ぬ。赤ん坊は死亡率が高いという、動物の世界では当たり前のことがらを、私は華やかさの中で忘れていたことに気がついた。もう一つは、彼の成長が止まる未来を妄想した。彼が成長しなくなれば、厄介な病気は回避できる。20年経っても3010gの赤ん坊のままの息子に、私たち夫婦がミルクを与え、オムツを替え、沐浴して暮らす姿を想像し、それでいいと本当に考えていた。赤ん坊のまま年を重ねていくことは、もちろん実際は起こりえないことだけれど、そうなることを願う気持ちが確かにあった。

医師が予測した高い確率のとおり、彼は一連の治療によって完治し、いまでは元気に過ごしている。「アンヘリートのお別れ」を聴きながら、いま・ここにいる息子は人並みに成長しているが、それとは対照的な、かつて願いを託した、もはや・ここにはいない赤ん坊のまま年を重ねる息子のことを思い出した。成長しない子どもなど、虚構にしかすぎないのだけれど、それは私にとって、いつ病状が悪化するかわからない息子に対する必死さのあらわれだった。天国へ旅立つ「アンヘリート」は、別れる家族に慈愛のメッセージを伝える。千葉の演奏と歌は、仮構の中につくり出されるリアリティが、現実の人間に新しい応答性をもたらすことを私に思い出させるものであった。

子どもは順調に成長し、医師のお墨付きももらったいま、私は再び油断しているのかもしれない。命の不確かさに敏感であった頃の私の気持ちや、赤ん坊のまま年を重ねる子どもを世話し続けることを願っていた頃の私の気持ちは、今の私には現実感の薄いものになってしまった。これはおそらく健全な変化であるのだけれども、共約不可能になった自己として、私の近くに漂っているようにも感じられる。今回のコンポジウムにおいて、音楽が、このような忘れかけた記憶や、わかり合えない他者、難解な学術的知見のような少し離れたところにあるものを、真に迫るものとしてとらえなおさせる効果を持つことが体験できた。

4.4 コンポジウムが生み出す体験の場（中山康雄・科学哲学）

私は、岡部らが中心となって企画した2016年2月11日のコンポジウムに参加した。そこでの感想を述べてみたい。まず、この日の二つのコンポジウムの場で、以前のベルリンでの私の留学時代および勤務時代について思い出したことを少し述べておきたい。私は、1976年から1991年にいたるまで14年半をドイツで生活していた。その間には、「ベルリンの壁の崩壊」という政治的転換も含まれている。ドイツにいたころ、自分が外国人であるということを強く意識していたように思う。そこでの人間関係は、理解を示してくれる人に限られていた。私は、受け入れてくれる人とそうでない人を峻別し、受け入れてくれる人たちの中で生きようとしていた。私には十分な余裕はなく、自分が生きる方策を見つけることで精いっぱいだったといえるだろう。そういう意味では、私は「相互性が成立する」ような他者を求めていた。そのような人は、外国での生

活経験を持つドイツ人であり、他文化に対する寛容性と感受性をすでに身につけた人たちだった。当時の私の生活態度には、「共に生きる場としての枠を、現実的にどのように広げることができるのか」という問題が隠れていたように思われる。

ところで、この2月のコンポジウムで特に私の記憶に残ったのは、「アンヘリートのお別れ」を聴く体験である。そこで、歌の奥から響く人の呼びかけが聴き取れたからである。スペイン語の響きは、私に、外国で生きるかつての自分を思い出させた。死者は、共に生きた人の生活態度からすぐに消えていきはしない。生きる者に対する態度とともに、近しい死者に対する態度も、自分が生きる中で新しく形成していかねばならない。このお別れの歌は、子どもの死の後もさらに生きるための第一歩を、死を悲しむ人たちに準備しているように思われた。この歌は、葬儀の中で歌い継がれ、即興で演奏されてきたという歴史を持っている。その重みがこの歌の響きの中に感じられた。

最後に、私が提題者のひとりでもあった第6回コンポジウムについて少し述べておこう。このコンポジウムは人間科学部本館1階のインターナショナル・カフェで開催された。私はここで、母子関係のつながりの生物学的基盤についての話をした。意見交換の場では、母子のケアを実践している人などから発言があり、大学の研究室にこもりがちの私にとっては現場の人々の考えを聞くよい機会となった。ここでも、他のコンポジウムと同様に、参加者たちこそが主役であり、主催者はそれを支援する側に属するということを実感した。このような参加者たちの積極的な姿勢が引き出されたのも、コンポジウムという新しい対話の形式をデザインした、稲場、千葉、岡部を核にするメンバーたちの力によるものだと考えている。私は、綿密に準備された会場に向かうことで、大学の日常では得ることのできない貴重な体験をすることができた。

4.5 音楽を愛するということ（新谷真美子・教育人間学）

昨年度から始まったコンポジウムに、院生のわたしは一人の研究者見習いとして、準備も含め参加させてもらっている。わたしはピアノを習っていた経験があり、音楽に関心があったため、自ら進んでコンポジウムに参加することにした。小学生の頃からクラシック音楽に親しんできたなかで、音楽をするならテクニックが何より大切であり、習得したテクニックを駆使して優れた演奏をすることや、個々人が他の人にはない自分らしさを表現することにこそ意味があるという考え方が染み付いていた。だが、コンポジウムでの出来事をきっかけに、そのような音楽に対する見方とは別の見方ができることを知った。それと同時に、他者との関わりについて以前とは異なった考え方に気づくことができたように思う。そのきっかけは次の出来事である。

コンポジウムには参加者全員で演奏する活動がある。打ち合わせで、参加者がリズムをとりやすいように、千葉のギターに合わせて学生スタッフが楽器で主要なリズムを打つことに決まった。練習でわたしはほとんど難なく楽器を演奏していたが、スタッフの一人はあまり音楽が得意そうではなく、楽器のリズムがだんだんずれていき、途中で止まってしまうこともあった。そのため、わたしは彼のとなりで一緒に楽器を鳴らすことにした。本番に備えて、彼が音楽の全体的な流れを乱さないように、わたしは一生懸命彼が「上手に」なるようはたらきかけていた。だが、何度練習をしてみても、彼が「上手に」演奏できるようになるのは難しいようだった。わたしは焦った。しかしながら、練習の場には「上手くできるまで練習をしなければならない」という雰囲気はまったく感じられず、彼がおぼつかないながらもなんとか一曲通して演奏できたときは、皆で喜びを味わい、そこであっさり練習が終わった。

練習のあと、わたしは少し物足りなさを感じながらも、上手に演奏することとは別の音楽のあり方に触れて、心が楽になったように感じていた。今までわたしは、音楽を愛しながら、「優れた演奏をしなければいけない」という感覚に縛られて、他者にも自分自身にさえも音楽の限定的な楽しみ方を押しつけ、音楽の良さを勝手に狭めていたように思う。しかし、コンポジウムの練習では、演奏が上手・下手にかかわらず、音楽をそこにいる人とともに楽しみ、音楽を慈しむ雰囲気に浸ることができ、そういった音楽もまた、居心地の良いものだと感じることができた。コンポジウムという場には、音楽にも人の間にも、優劣などなかった。人は、そんな経験を生きることができるのだ。それが、わたしにとってのコンポジウムだった。

4.6 利他コンポジウムの経験（栗本英世・文化人類学）

2016年2月11日に連続して開催された第4回と第5回の利他コンポジウムへの参加は、私にとってまさに蒙を啓かれた新しい経験であった。幼少期から私はへそまがりで、幼稚園や学校の教育の一環として集団でなにかをやらされることが苦痛だった。集団への無条件の同調を強いられる遊戯、音楽や体操を楽しいと思ったことはなかった。そういう生来のひねくれた性格なので、なにやら全員でゲームのようなことや歌を歌ったりするらしい「コンポジウム」に対しても否定的な先入観を抱いていた。

結論から述べると、私の先入観は完全に裏切られた。コンポジウムは、自由で即興的でありながら、はじめて出会った参加者たちのあいだで共感が形成される創造的な場であった。他の執筆者もくりかえし書いているが、コンポジウムのハイライトは、千葉による「アンヘリートのお別れ」の演奏と歌唱、そして参加者によるこの歌を聴いて感じた「想い」の語り合いであった。この歌は、おおくの意味で特殊である。日本から遠く離れた南米のチリの伝承歌で、歌詞は当然スペイン語である。乳幼児の葬式で歌われ、その歌詞は、亡くなった幼い子どもが「わたしは天国に召されるのだから悲しまないでほしい」と残された家族に一人称で語りかけるという内容である。しかも、通常の悲歌と異なり、この歌の旋律は長調だ。以上の特殊性にもかかわらず、そして事前に主催者側から与えられた情報は、「誰かから誰かへのメッセージ」であるということだけであったにもかかわらず、多数の参加者が、この歌が歌われる文脈と歌詞が全体として意味している内容を、ほぼ正確に言い当てたのだった。

この経験は、私にとっておおきな驚きであった。そして、人間には遠く離れた他者の経験に共感できる能力が備わっていること、それこそが人間が人間であるゆえんであるかもしれないことを再認識したのだった。

千葉と岡部の議論のように、こうした共感を支えているのは「メタ・メッセージ」を読み取る能力なのだろう。考えてみれば、優れた芸術や芸能は、おしなべて「メタ・メッセージ」の強い伝達力を備えている。この伝達力は、時間と空間や、さまざまな境界を越える。コンポジウムにおいては、「アンヘリートのお別れ」が歌われた葬式に実際に参加したことがあり、この歌の「メタ・メッセージ」をみずから受け取り、身体化した千葉の真に迫ったパフォーマンスが、伝達力を強めたのだろう。

私は、人類学的研究を進めるなかで、南スーダンのパリという民族の人びとと長年付き合ってきた。フィールドワークの経験において、もっとも幸福な瞬間は、「他者」である人びとと「想いが通じた」「想いを共有できた」と実感できるときである。こうした瞬間は、しばしばあるわけではない。数年や十数年かけて、おたがいの人生に寄り添うように歩んでいく過程で、こうした幸福な瞬間は突然、予期しないかたちで訪れる。酒食を共にすること、共に歌い踊ることは、「想い」を通じさせ、共有させるための不可欠の契機である。世代を超えて伝承されてきた儀礼や歌舞は、そのための文化的な装置なのかもしれない。

メタ・メッセージの理解が共有されるこうした場は、特定の文化や集団と結びついており、世代を経て構築されてきたものであることがふつうである。コンポジウムが驚きであるのは、はじめて出会うメンバーのあいだで、こうした場がほとんど瞬間的に現前することだ。これは本当に驚異的である。もちろん、これが可能になるのは、千葉や岡部らによる入念でプロフェッショナルな準備があるからである。しかも、加えて驚きであるのは、主催者側の「仕掛け」に、押しつけがましさがいっさいないことだ。参加者は、あらかじめ決められたゴールへと誘導されているという感覚を持つことはない。参加者が経験する過程は、自由で即興的で、かつ創造的だ。それは、卓越した技量のミュージシャンたちによるジャズの即興演奏に似ている。しかし、コンポジウムの参加者には、特別な能力や技はいっさい必要ではない。

コンポジウムの経験は、得がたい貴重なものだ。そして未来に対する希望を抱かせてくれる。私は、この試みが継続し、広がっていくことを願っている。

5. おわりに

5.1 音楽がかきたてる創造的な対話（千葉泉）

今回のコンポジウムは、幾重にもわたって、創造的な対話が構築されるプロセスであった。

30年近くにわたって、大学の授業や学外での講演・演奏等でラテンアメリカの歌謡を紹介してきたが、これまでは、必ず事前に聴衆に対し、それぞれの歌

謡の特徴やその歴史的背景を説明し、日本語訳を併記したスペイン語の歌詞を紙面で配布するという形で演奏を行ってきた。各歌謡が伝えるものは、完結したメッセージであり、演奏者の役割は、その知識を聴取者に対して一方的に、「正しく」付与することにある、と理解していたからだ。換言すれば、演奏というプロセスを通して、「与える者」(演奏者)と「与えられる者」(聴き手)のそれぞれの位置づけは固定化され、変化することはないことを前提としていた。

ところが、自分にとって未知の分野である教育哲学に立脚する岡部や、岡部が指導する院生・学生たちとの交流の中で実現したこのコンポジウムは、私のこうした静態的な理解を覆し、音楽が誘発する豊かな相互的コミュニケーションの可能性を教えてくれた。

岡部は、歌詞など、目に見える言語表現の外側あるいは背後に存在する「メタ・メッセージ」をこそ問題にしていた。メタ・メッセージは、明示的に存在するメッセージを越えたものなので、つねに受け手側の解釈が「ずれる」可能性をはらみ、「受け手」側からの「理解しよう」という積極的な歩み寄りを必要とする。だからこそ受け手が、みずからの経験と意志に基づいて、自由に「想いをはせる」という能動的かつ創造的な行為を誘発する可能性を秘めている。

そもそも、岡部が今回のコンポジウムを企画するきっかけとなったのも、千葉の歌に強力なメタ・メッセージを感じたからだった。実質的に初対面だった岡部の研究室を初めて訪れた際、千葉は自己紹介を兼ねて「アンヘリートのお別れ」の歌を歌ってみた。そのとき、岡部が想いをはせたのは、東日本大震災で亡くなった人々や、家族を亡くした人々だった。その後、院生の上林や新谷とともに行った実験も、音楽が深い対話を促進しうることを示唆していた。

そして本番のコンポジウムも、職業や年齢、性別に関係なく、明示的な言語を越えたメッセージが確かに伝達されること、そして、その結果、歌い手と聴き手の間に当初設定されていた一方的関係が打破され、相互的かつ創造的な関係が発生することを示した。

歌に関する情報を事前に提供しないことは、聴き手が自分のこれまでの経験や現在の想いに照らし合わせて、自由に解釈することを促進した。聴き手は、歌われているであろう内容や、歌の作者、あるいは演奏者の意識に想いをはせると同時に、無意識の地平に閉じ込められていた自分自身の過去の記憶や、その場にいない人との思い出、過去の自分、忘れていた経験やできごとなどを想起した。

固定された「正解ありき」の解説を省くことで、歌のもつ歌詞以外のさまざまなメタ・メッセージを手掛かりに、各自が、ぞれぞれの心に内在する生きた、それ自身の勢いを持つ「想い」の飛翔を促す。その結果、それぞれの想いが力強く羽ばたき、結びつきたいものと結びつく。こうして、自然に、そして深く人々をつなげる。

そもそも音楽そのものが、何かしら、コミュニケーションを促進するという特徴を備えているが、今回のように、事前の説明なしで聞いてもらう、という形式を取ることによって、歌の持つ「想いを喚起する・つなぐ」という機能が、一層強力な形で発揮されたと考えられる。

岡部と同じく、それまでほとんど交流のなかった他分野の研究者(稲場、中道、山田、中山、栗本)や院生(上林、新谷)も、各自の経験に引き付けながら、歌に喚起された想いや記憶について語り、そして文章でも綴ってくれた。一般の参加者たちも、それぞれが思い起こしたことがらを、積極的に分かち合ってくれた。ある男性は、一か月前に幼いわが子を病気で亡くし、悲しみに暮れる友人夫婦を、一体どうして励ましたらいいのかと悩んだ挙句、カラオケに誘って思い切り歌い合ったという経験を語ってくれた。「きっと、あれでよかったんやな…」そうつぶやいた男性の表情は、幾分安らいだように見えた。

音楽は、人々の固定化された一方的関係を打破し、豊かで相互作用的な関係に書き換える。この大切なことに、今回のコンポジウムは気付かせてくれた。これは、教育哲学の立場から、ことばの持つ意味について研究と実践を積み重ねてきた岡部との協労だからこそ可能となることだった。

自分が完全に理解できることでなくても、他者のもっている・やっている、何か気になることに積極的に興味を持ち、声をかけ、一緒に何かやってみる。その実践の過程で、他者も変わるし自分も変わる。その結果、全く同じ考えになるわけではないが、その他者のことが、もう少しよく理解できるようになる。また、単独では実行不可能なことができたり、自分がもっているもの、やっていることのより普遍的な意味を学び合うことができる。こうして、以前よりも深い絆が両者の間に生まれる。

私にとって今回のコンポジウムは、今後、人間科学がめざすべき方向について、大きな示唆を与える経験となった。

5.2 人間が生きる世界に根ざす（岡部美香）

想いや考えをことばで人に伝えることは、本当に難しい。講義を提供すること、演習で議論をすること、学会や研究会で発表すること、論文を書くこと。本稿で報告したコンポジウムも、そうだ。大学教員であり研究者である私の生活は、ことばを使うという仕業に充ちている。大学院に進学してから25年、大学に職を得てからももう20年が過ぎようとしているから、けっして不慣れなわけではない。だが、ことばを使うことは、いまもなお怖い。

怖いのは、誤解が生まれることではない。学問研究において、誤解はけっして厭うべき事態ではない。むしろ、それが自らの語感・語用や思考の道筋を反省し、あらためて鍛え直す契機となるのだから、日常会話より明晰なことば使いが求められる学問研究においては、かえってありがたい。

怖いのは、理解されることである。これは、二重の意味においてそうだといえる。

まず一つめ。私は、講義や演習の際にはほぼ毎回、終了時に受講者にコメントを書いてもらう。そのなかには、その回の講義や演習で私が語ったことばをほとんどそのまま正確に再現しているものがある。そのようなコメントを読むといつも私は、鏡をいきなり鼻先につきつけられたかのような、あるいは、のっぺらぼうに出くわしたかのような、落ち着かなさ、そして不安を覚える。この受講者にとって、私の講義や演習は何か意味のあるものだったのだろうか、と。彼（女）は、たいていが、まじめで優秀な学生・院生である。学校のテストや受験なら、パーフェクトな振る舞いだろう。だが、講義や演習で私が語り掛けたことばは、彼（女）のなかに、そして彼（女）と私の間にも何も新たに生起させはしなかった。私のことばは無力だったのだ。

何も新しく生起せず、同じことがくり返しコピーされていく世界。それは、機械の世界であって、人間が生きる世界ではない。そこには、学びも経験もない。学びは、和語の「まねぶ」から派生した語であり、確かに、真似る、模倣するという意味がある。だが、真似や模倣には、相手のことばやしぐさを、自分の声や身体あるいは自分が置かれている状況に合わせて調整するという過程が必ず含まれる。つまり、似ていても必ずどこかずれている。また、経験は、語源的には実験と通じており、「やってみなければわからない」「やってみて初めてわかる」という不確実性、賭けの偶然性を包含している。同じことがくり返されるオートメーション機械の世界では、学びも経験も生起しようがないのだ。

そのような世界におのずから、たやすくはびこる悪を、H・アーレントは「凡庸な悪」と呼んだ。思考をしないですます、自分では何も始めない（イニシアティヴを採らない）という、この誰もが意図も意識もせずいつの間にか手を染めている「凡庸な悪」の行き着く先は、アウシュヴィッツである。

今回のコンポジウムでは、このような怖さを感じないよう、千葉と私は一つの仕掛けをさし込んだ。それは、チリ民謡「アンヘリートのお別れ」を、原スペイン語で、何の情報も提供しないままで、まず参加者に聴いてもらい、感じたことを自由に語り合ってもらう、というものだ。語り合いがスムーズに成り立つよう、導入時のゲームで、身体と精神をほぐしてもらうことも試みた。この仕掛けと試みは、本稿「4.1」の中道のコメントや「4.6」の栗本のコメントにもあるように、どうやら功を奏したようだ。

さて、もう一つの怖さ。これは、実のところ、得がたい歓びと表裏一体のものでもある。本稿「4.3」にある山田のコメントが送られてきたとき、私が最初に抱いたのは「畏れ多いことをしたのではないか」という想いだった。もう過ぎ去ったとはいえ、大切な、大切な記憶。私たちが触れてよいものなのか。また、当日の一般参加者からも、長いメールをいただいた。愛憎という一言ではとても表現できない、家族の間を交錯するメビウスの輪のような情感を、お母様の死後になってようやく懐かしみ、慈しむことができるようになった、とそこには綴られていた。私は、自分がこのことを知ってよいのか、自分はこのメールの宛先に値する人間なのか、と自問せざるを得なかった。

確かに、千葉と私は、コンポジウムで供した自らの歌とことばが、一人でもいい、誰かの心の琴線に触れてくれれば、と望んでいた。参加者にコメントを依頼するに際して、もしかしたら、それが確かめられるかもしれない、という淡い期待がなかったわけでもない。だが、期待や予測を大きく超えて誰かの何かが動くことに偶然にもかかわると、自らの驕慢さ、卑小さこそが際立つ。

だが他方で、私たちの歌とことばに応答してくれた、そのことばにこそ、きちんと応答できる研究者、少なくともそれをしっかり受けとめられる研究者でありたい、という想いも息吹く。この想いは、千葉と私の研究者としての成長をきっと促してくれるだろう。

「はじめに」において、これからの研究者は、自らの研究成果を日常の生活世界でこそ意味あるものとして位置づけなければならない、と私は述べた。これは、上述のように、二重の意味（誤解されることが怖い人には、三重の意味）の「怖さ」に曝される経験でもある。だが、この経験を通して、私たちの歌とことばは鍛えられるし、また、誰かの何かが拓かれ、動き出すこともある。このことが、次の経験へと向かう力を、私たちのなかに漲らせる。このように応答的、対話的に誰かの何かが拓かれ、動く世界は、機械のオートメーションの世界でもなく、ましてや、アウシュヴィッツでもなく、人間が学び、経験しつつ、生きている世界である。人間科学は、このような世界にこそ、根ざすものではないだろうか。

注

1　「特集　利他を考える」『未来共生学』第2号、大阪大学 未来共生イノベーター博士課程プログラム、2015年、11-140頁。

参照文献

岡部美香

2015 「利他としての無為――共約不可能な他者とのかかわりに関する原理的考察」『未来共生学』2: 125-140。

カント、イマニュエル

1973（原典は1783）「プロレゴメナ」『カント全集6』原佑・湯本和男訳、東京：理想社。

2013（原典は1766）『視霊者の夢』金森誠也訳、東京：講談社学術文庫。

鈴木晶子

2013 『智恵なすわざの再生へ――科学の原罪』（シリーズ・ともに生きる科学）、京都：ミネルヴァ書房。

千葉泉

2005 「『祝祭』から『昇華儀礼』へ――チリ中央部における幼児葬礼の変遷」『大阪外国語大学論集』31: 1-27。

2016 「共生のためのコミュニケーション・ツールとしての音楽」河森正人・栗本英世・志水宏吉編『共生学が創る世界』pp.258-261、大阪：大阪大学出版会。